

京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

「システム内存在としての世界についてのアートを媒介とする文理融合的研究」

Research in a ‘Totally Systematized World’: Media-Art, Humanities, and Natural Science

2. 研究代表者氏名

三輪眞弘

Masahiro MIWA

3. 研究期間

2019年4月-2022年3月

4. 研究目的

現在、われわれ人類は人為的エネルギーに支えられた高度テクノロジーの只中で生きており、一見「自然」や「環境」や「心」と見えるものすら、システムなしに存立し得ない状況に至っている。本研究はこの認識から出発する。そして生命や心さえ含む地上の全存在が巨大システムに組み込まれていくこの時代の相貌につき、「サイバネティクス」「テクノロジー」「メディア」「情報学」を切り口とし、芸術創造に携わる申請者が媒介となることで人文学系と自然科学系の知見の総合をはかり、学知の認識を紙媒体だけでなくビデオアートや音楽作品の制作という感性的次元において発信する可能性を探る。これが本研究の目的である。つまり本研究は ①全人類的な問題についてのアートを媒介とする文理融合研究の実践モデルを示し、かつ ②学知を感性メディアを通してより直接的に社会へと接続しようとするものである。なお「システム」についての申請者の考えについては『三輪眞弘音楽藝術 全思考 一九九八～二〇一〇』（アルテスパブリッシング、2010年）を参照されたい。

We are now living in a totally systemized, high-technology world which is completely dependent on electrical energy, and even things that we regard as ‘Nature’ or the ‘Environment’ or the ‘Human Spirit’ could not continue to exist without this system. In this project, characteristics of the contemporary world will be researched in terms of cybernetics, technology, media and information theory. The overall purpose of this research is to synthesize knowledge of both natural science as well as the humanities, and to create media-based art works inspired by this research.

5. 研究成果の概要

全期間を通して15回（ズームを含む）の研究会の最大の目的は、人文学の最先端の知見に一流のアーティストに接してもらい、それを触媒とするアート作品によって社会発信をする点にあった。その白眉は2020年のオンライン・イベント（人文研と共催）「ぎふ未来音楽展2020 三輪眞弘祭 -清められた夜-」（9月19日）のライブ配信である。無観客配信によるこのイベントは「人が集えない時代」の意味を問うもので、特設サイトを設け（英語版もあり）、当日リアルタイムのみの中継であったにもかかわらず、視聴回数は3156、全体の5%が海外からの視聴だった（アメリカ、インドネシア、ドイツ、イギリス、オーストリア、台湾など）。また公演当日のウェブサイト訪問者は2583人（のべではなく、個別ユーザ数）、ページビュー数 9819回である。また8月28日にはオンラインでプレイベント：「プロローグ「音楽の終わりの終わり」は、ここからはじまる——」を中継した。

このオンラインイベントは朝日新聞12月17日「2020年の回顧」欄（音楽）において片山杜秀氏により「今年の三点」に選ばれたのみならず、『佐治敬三賞』と『サントリー音楽賞』に選ばれるという、ダブル受賞の快挙を成し遂げた。また岡田暁生は研究班での議論に基づく論考『「第九」- 再び抱き合えるか』（8月4日 朝日新聞朝刊全国版・論考）を発表、また三輪のイベントとセットの形で9月に発行された『音楽の危機』（中公新書）は四大新聞を含む15を超えるメディアの書評等で取り上げられ、1月1日（22時～）のNHK・FMで坂本龍一により紹介され、2021年には小林秀雄賞および京都府文化功労章を受章した。

なお本研究班は上述のオンラインイベント以外に、アルテスパブリッシングから通常の書籍媒体による成果発信を目指しており、現在鋭意編作業である。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

- ・「ぎふ未来音楽展2020 三輪眞弘祭 -清められた夜-」（2020年9月19日）のライブ配信（視聴回数は3156、全体の5%が海外からの視聴、また公演当日のウェブサイト訪問者は2583人）＝2020年度サントリー音楽賞・佐治敬三賞をダブル受賞
- ・そのプレイベント：「プロローグ「音楽の終わりの終わり」は、ここからはじまる——」（2020年8月28日）
- ・三輪と岡田による動画「コロナ時代の未来の音楽」を制作してYoutubeにアップ（2020年11月）
- ・岩崎秀雄（生物学者・バイオアーティスト）による五輪文化イベントの一環／オンラインバイオアート作品「配信を禁じられた無観客展示」をYoutubeでアップ（2021年7月）
- ・2020年9月：岡田暁生『音楽の危機』（中公新書）＝2021年度小林秀雄賞・京都府文化功労章をダブル受賞

・2021年4月：松井茂『虚像培養芸術論 アートとテレビジョンの想像力』（勁草書房）

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

上述のように本研究班は、書籍媒体による成果公開のため、実質的に来年度も継続することになる。書籍形式による成果まとめは「配信芸術」をキーワードとし、斬新な音楽書籍で知られるアルテスパブリッシングからの出版を予定している。また本研究班の主要目的は、人文学の最先端の議論にアート実践にかかわる人々に触れてもらい、書籍媒体ではなく作品創作による人文学の社会発信の新しい形式を模索する点にあり、2022年9月18日 サラマンカホール「ぎふ未来音楽展」において、ライブ形式と配信を融合した音楽作品の発表が予定されている。またサントリーホールにおいても2023年に二回の班長三輪の「配信芸術」の理念に基づくコンサートが行われる予定である。さらに2021年9月にサラマンカホールで行われ、サントリー音楽賞を受賞するなど大きな反響を呼んだオンラインパフォーマンスが、5月28日 - 6月19日、The Terminal KYOTOにおけるファルマコン展「新生への捧げもの」において、再度上映される予定になっている。